
ベルゼルト

風上甲焚

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ベルゼルト

【Nコード】

N7185R

【作者名】

風上甲焚

【あらすじ】

トランプのダイヤのような形をした大陸、そこが舞台。
物好きな少年シンギはある場所を探して森へと入る。

「少年が村に来るまで1」 (前書き)

初めて投稿するので上手く書けている自信がありません、期待はしないください。

でも読んでもらえると嬉しいです。

「少年が村に来るまで1」

1 出合い

ここにひとつの大陸があった。

大陸には北、南、東、西、中央の5つに分かれた国がある。

その大陸の南の国と東の国の国境付近の森に人がいた。

空を仰げば空が見える、それは当然のことだ。

それでも少年は空を見る、意味もなく。

空を見れば、きつと・・・・・・・・。

きつと道がわかるから！

「・・・・・・・・完全に迷ったな」

切り株に座り、空を眺めながら少年は言った。

今いる場所はアイルスの森という名前でかなり広い。

その森の中に「隠れ村」と呼ばれる上空から森全体を見ても確認できない本当に隠れている村がある。

物好きな人はその村を探しに森に入るのだが今まで誰一人と見つけたものはいない―そんな村が何故知られているかというところから町に出た者が隠れ村のことを話したため―

切り株に座る少年、シンギ・ガラバクトもその隠れ村を探す物好きの一人だ。

だが森に入ったのはいいがそのまま迷ってしまい出られなくなる最悪な状況下に彼はいる。

自分以外は誰もいない、不安が加速するが。

「さくどくしよっかな」

声はあくまでも余裕だ。

考えること数分。

「ん……すぴ」

のんきにも眠りについたシンギ、ゆっくりと時が過ぎてゆく。

どれほど寝たかわからなくなったころ。

「……くらいね」

寝起きの第一声をつぶやき目覚めるものの。

「うーん……やっぱりさっきの場所だよね」

状況はまるで変わらない、変わったのは時間が過ぎ、空が漆黒に染まりはじめたぐらいだ。

しかし、もうひとつの変化があったことにシンギはもちろん気づいていない。

やつは音を立てずに潜んでいた。

獲物を見つけて潜んでいる。

紅い相貌を輝かせ。

のんきに背伸びをする少年の後ろに潜んでいる。

「……そろそろ動くとするか」

少年が村に来るまで2

「だれ！」

何かがやってくる、何かまではわからないが勘がそういつている。怒鳴るとそれはすぐに姿を現した。

「なんだ、間抜けかと思ったら」

緊張感のない声で現れたそれは少年だった。

シンギと同じぐらいの年齢だと思われる外見に相手を威嚇するような相貌。

目の色は血を連想させる紅。

やや細みな体つきだが手には巨大な剣――本来なら両手剣のサイズなのだが少年はそれを片手で持っている――

「以外に鋭いみたいだな」

いつの間に後ろに回られていたのかもわからない相手にシンギは緊張を感じながらも

「そうなんだよねー結構強いんだよ僕ー」

と強がって見たがそんなもので相手が引き下がってくれるとはもちろん思っていない。

「冷や汗流しながら威嚇しても怖くないぜ？」

余裕の発言、この時点でもう勝ち目はほとんどないようにも見えるが。

「ふふふ脳ある鷹はつめを隠すんだよ」

まだ強がって見た、が。

「どうだか、見栄っ張りした後で痛い目見るぜ」
皮肉つきで返された。

「とまあ、いつまでもだらだら言い合っているわけにもいかないから」

その瞬間やや気楽だった空気が少年が剣を水平に構えることで一気に凍りついた。

「悪いけど消えてもらうぜ」

薄く微笑みながら剣を構える、纏う空気は絶対零度のごとく冷たい。

「……悪いけど死にたくはないね」

恐怖を押し殺しながらシンギも戦闘体勢にはいる、武器は……弓だ。

「……弓か、距離のことを考えると俺のほうが有利だな」

弓と剣では遠距離から攻撃できる弓のほうがやや有利なのだが今は至近距離、しかもリーチの長い大剣が武器なので相手の間合いに入りやすい。

いっそのまま逃げるという選択肢もあるが相手は寸前まで気配をまったく感じなかった相手、今度背後に回りこまれたら命はないだろう、それよりかは戦うほうが幾分ましなのではないか、これがシンギの考えだ。

しかしその考えが半分間違いだった。

シンギが構えを取ろうとした瞬間、腕に切れ目が入ったのは同時だった。

何が起こったかは襲撃してきた少年しかわからないだろう、本能のままシンギは後ろに飛んでいた。

驚愕の表情のまま腕を見ると、赤い液体が地面に落ちて行くのがわかった。

少年が村に来るまで3

「・・・構えぐらい取らせても罰は当たらないと思うよ」

時間を稼ぐために少しの余裕を見せながら本音を口にする、が。

「知るかよ、そんなこと」

余裕をすぐに打ち砕く発言。

相手の気迫から感じる、この子と僕には技量に圧倒的な差がある。

先ほどの甘い考えをした自分をシンギは恨んだ。

何が戦ったほうがましだ、逃げてでも戦っても結果は同じじゃないか。

僕はここで死ぬのか、後ろ向きな考えがよぎる。

「死後の世界ってどんなものなのか」

シンギの頭はいろんなことが駆け巡っている。

これが走馬灯ってやつかな、などと自分の世界に入りかけたころ。

「・・・ひとつ訊いていいか」

いきなりの出来事で瞬間的にもとの世界に引き戻される。

「え、なに」

唐突過ぎて普通に返事をしてしまう。

「お前がここまで来たのは『隠れ村』のためか」

隠れ村、覚えのある単語が出てきた。

なぜ彼が知っているのかは知らないが無駄なことはせずに素直に

答えることにした。

「そうだよ、僕はそこで生活したいがためにここに来たんだ！」

言い放った、偽りのない言葉を言い放った。

こんなことでどうにかなると思っていなかったが。

「は？」

どうにかなった、少年が思わぬ反応を示してきたのだ。

「・・・・・・・・そんな理由か」

「そんなとは何だそんなとは！」

かっとなって怒鳴ってしまった。

しまったと思ったがすぐに問題ないことがわかる。

先ほどまで放たれていた凍てつくような殺気がどんどん治まっていった。

「またも唐突な出来事に咄然とするシンギ、それにかまわず少年は続ける。」

「なんだよ、これじゃ俺馬鹿みたいじゃないか」

ぶつぶつと何か言い続ける少年、何が起こったか理解できずにいると。

「お前名前は」

突如として名前を聞かれた、さっきからわけのわからないことばかりだ。

「シンギ・ガラバクト」

もう慣れたのか普通に答えるシンギ。

「シンギか………についてこい、案内するから」

そういつて歩き出す少年、その行動にシンギは不満があった。

「ちょ、ちょっと君」

怒りをあらわにしながら詰め寄るシンギ、少年は鬱陶しそうな表情で振り返る。

「人に名乗らせたのなら自分も名乗るべきでしょ普通！」

どこか怒りの矛先が違うような気がするがそこには触れないことにする。

「………それもそうか、俺はシュウ・ヴァルセルク」

「シュウねOK覚えた」

とウインクしながら言ってみるが

「ならとっとと行くぞ、ついて来い」

せっかく愛想よくしたのにこの反応はどうだろうと不満は持つものの。

「あ、ちょっとまってよ」

早足で行ってしまうシュウをシンギは急いで追った

シングとシュウ、この変な出会いはまだ物語の序章にも達していないときの話である。

村生活のイロハ1

「森の中で人が生活してる!？」

シンギ・ガラバクトは思わず叫んでいた、半信半疑でいたために本当に人がいるとは思ってもいなかった。

驚きのまま動けないでいると。

「自分でこの村を探していたくせにその反応か」

隣から声がかかった、声の主はシンギをここまで案内した張本人、シュウ・ヴァルセルクだ。

「いや、本当に生活していたなんて思わなくて・・・」

ありのままの気持ちを言葉にしてみたら。

「じゃあお前は何のためにここを探していたんだ」

もつともな理由で返された。

「でも本当に何も無い森の中で生活していたら驚くじゃん」

「そんなのは町育ちの人間の意見だ、現に森の中でも人は生きている」

やや不満気味に言い返すシュウ。それはそうだろう、行きたいといつてつれてきたのにいろいろ言われたら誰でも不満になるだろう。

「とにかくこの村の勝手はあの人に説明してもらおうが早いな」

まだ驚いてるシンギをよそにシュウは話を進めようとする。

「あの人？」

その単語が気になったのかシュウの方向に向きなおってシンギが聞く。

「それって誰？」

首をかしげ聞いて見る。

「この村で一番頼りになる人のことさ」

それだけ言うについてこいと言って二人はまた歩き出した。

しばらく歩くと家が見えた。おそらくここがシュウの言う頼りに

なる人の家なのだろう。

シュウがドアをノックすると数秒も経たずに「入っていいぞ」と返事が帰ってきた。ドア越したがそれは女性のものだとわかった。

「そんなじゃおじゃまします」

それだけ言うとな何のためらいもなくドアを開けた。

それといい匂いがし始めたのはほぼ同時だった。

「あれ、この匂い……」

シンギが小さく呟く、なんだか懐かしい香り、もしかしたら僕は毎日食べてたかも……。

いろいろ考えているシンギをよそにシュウは家の中へと足を踏み入れ。

「また得体の知れない匂いがするな」
と言った。

「得体の知れないってそれは失礼でしょ」

確かに異臭がしていると思われるもおかしくない言い方をするのは失礼であろうがシュウはそれをまったく気にしていない。

シンギが玄関でぼーっとしていると家の奥から二つの皿を持った女の人が出てきた、おそらく先ほどの声の主だろう。

女の人は驚いたような顔をして「なんだもう一人いたのか。待ってる今用意する」と言って皿を置いたらまた奥へといってしまった。

今度はもう一枚の皿を持ちながらに出てきた。

皿を机に並べるとシュウが勝手に席に着き女の人がその向かいに座った。

どうしていいのか分からずオロオロしているシンギを見て女の方はシュウの左隣に座るよう促した。

言われた通りにすると女の人が今度は食べろと促した。

恐る恐る皿を見ると、そこには白いスープのような液体に野菜や肉が入ったものが目に入った。

おいがした時点でもしやと思っていたがこれはまさに。

「シチューだ……」

村生活のイロハ2

思わず呟いた、自分が町にいたときはかなりの頻度―特に冬の時期に―食べていたものだ。

森の中にある村だと言うからどんな原始的なものを食べているかと思いきや町で食べているものと同じものとは、少し安心したのと少し期待はずれな気分になった。

とりあえず口をつけてみる、瞬間シンギは絶句した。
うますぎる！

物を口に含んでいた為に声は出せなかったがあまりの美味しさに飲み込むとすらも忘れていた。

飲み込んだあともこれがいつも自分が食べていたものと同じものだとは思えずしばらく停止していた。

「味はいかがかな。お客人」

不意に声をかけられやや焦りながら。

「ものすごく美味しいです！良い意味で人が作ったものとは思えません！」

良い意味で……がなければ明らかな悪口に聞こえるかもしれない感想を言った。

「そうかそれはよかった。外から来た人に料理を振舞ったことなんて無かったから口に合うか心配だったんだが、これで一安心だ」

やさしい声音で女の人が言った。

しかし次の瞬間その声音がまじめなものに変わった。

「ところで隠れ村^{こもり}へは何をしに？」

突如としてまじめな話になったのでシンギはスプーンを銜えたままきっかり三秒固まる。

「うあ……えと……その……」

シンギが何を言おうか迷っていると。

「この村で生活がしたと言ってきたから連れてきた」

ひたすら食事にありついていていたシュウが大雑把に説明する。

「なるほど、それでこの村で生活するためのイロハを教えるためにここまで連れてきた……そういうことで良いかシュウ」

シュウが無言で頷くと女の人はシングのほうに向き直る。

「そういうわけだお客人、名前は？」

何がそういうわけなのかは分からないがとりあえず返事をしておいたほうがいいだろうと判断する。

「し、シング・ガラバクトです」

「シングか、良い名前だ。私はサクラ・アトワールド、よろしく」

女の人、サクラ・アトワールドは手を差し伸べた、シングはそれが握手を求めていると理解するのにまた三秒かった。

二人が握手を済ませるとサクラは「この村で暮らすためのイロハについて話し出した。」

村で暮らすための掟1―家は自分で作れ―。

村では自分の住まいは自分で作る、これぐらいできないと生活は無理だとサクラは言う。

もちろんシュウの家も自分で作ったものらしい。

村で暮らすための掟2―食材は自分で調達せよ―

食事は自分で調達して自分で調達、調理せよ。

自給自足もこの村の常識、これもまたサクラ曰くだ。

そのほかいろいろなことをシングは叩き込まれた。

説明が終わるとシングは早速自分の家を作らされた。

自分で森から木を切り運ぶ、そんな原始的なことから初め一から組み立てていく家、途中からシュウとサクラも手伝いに入っただが作業は次の日の朝までかった。

家ができた瞬間シングは前のめりに倒れる、目が覚めたのは昼を過ぎたころだった。

目が覚めてはじめてみた風景は見たことも無い風景だった。木の天井なんて家にあっただけ？

頭が働かないまま体を起こしさらに周りを見る。

できたばかりのログハウス、風通しがよいのか部屋の中はとても涼しい。

しかしここはどこだろう？わからないなあ。

外に出るとこれまた見慣れぬ風景が広がった。まるで森の中にいるような場所。

シングの頭に？マークが浮かんでいると横から声かけられた。

「よう、起きたか」

そちらを見ると見慣れない紅い目の少年がそこにはいた。

寝ぼけなまこのままその少年にシングは聞いた。

「ここはどこですか？あなたはだれですか？」

村生活のイロハ3

一時間後のこと、サクラの家にはやや顔が赤く俯いているシンギと呆れ顔のシュウ、そして無邪気に笑うサクラがいた。

「一日経っただけで忘れられるのは不本意だな」

シュウが不満そうに言うとしンギが俯いたまま目だけ上を見て。

「しかたないじゃん」

小さく呟いた。

目が覚めたとき、あまりの疲労で頭が働かず新しい生活場所で新しい出会いをしたことを一時的に忘れてたシンギは記憶が戻ってから底知れはい恥ずかしさがこみ上げてきた。

シュウはまだやることがあると云ってサクラの元に二人でやってきて先ほどのことを話して今に至るわけだ。

この空気のままじゃ自分が不利だと思ったシンギは話題を変えるという選択で何とかその場をしのぐ。

「で、やることって何ですか？」

僕まだ疲れているんですけど付け足して疲労があるということのアピールする。

だが返ってきた答えはさほど体力を使うことではなかった。

「あいさつ回りだ」

森の中の村、名前を聞いただけでどんな野蛮な人が住んでいるのだろうと初めはそう思っていた。

しかし実際に挨拶をしていくとどこにでもいるような人たちばかりでまるで自分の住んでいた町から隣町に遊びに来たような感覚だ。シンギはそんな感覚の中シュウとサクラについて歩く。

あいさつ回りをしていると一人だけ気になる人がいた。

その男は部屋の奥で寝ていた、昼だと言うのに起きる気配がまったく無い。

体が大きく身長は一八〇センチはあるだろうか？

そんな大男が寝ている部屋にサクラは躊躇無く入っていく。

「起きろダイガン、新しい住人だ」

やや大きい声でさらにけりをかまして男を起こす。

けられて男がむっくりと言う表現がぴったりの動きで体を起こす、向けられた相貌はまだ寝かせると訴えている。

「……何か用か」

低くよく響く声でダイガンと呼ばれた男はサクラに聞く。

「だから新しい住人が来たと言っているだろうが」

呆れ気味の声でサクラが言う。

「相変わらずだな、ダイガンさん」

シュウも呆れ気味に言う。

本日二度目の頭に？マークを浮かべているシンギ、それを見てサクラが説明をした。

「こいつは村一番の怠け者だ、ほらダイガン、自己紹介」

まるで母親のような口調で言う、頭を掻きながらゆっくりと男がしゃべる。

「ここに来るとはとんだ物好きだな、名前は？」

自己紹介をしろといわれたはずなのにまったくその気がない会話をする男、世の中いろんな人がいるんだなあと怒りを覚えず何かを学んだシンギ、とりあえず名乗ることにする。

「シンギ・ガラバクトです」

「シンギか、俺はダイガン、そんだけ」

ものすごくあっさりと必要最低限を伝え男はそのまま座り込む。挨拶をそんだけで済まされて戸惑うシンギ、見ていたサクラはため息をつきながら再びダイガンを蹴る。

「お前は人に自分のことを知ってもらおうという気がないのか」

「しまったことじゃねーよ」

いろいろともめている二人にシンギは話しかけようとするが。

「やめておけ」

先ほどから喋っていないシュウが突然口を開いた。

「この二人は口喧嘩を始めたらしばらくは止まらない、黙っていたほうが良い」

ありがたいのかよくわからない忠告、それでも黙り続けるのは酷だと思ったので今話せるシュウに話を聞いてみることにした。

「この男の人ってどんな人なの？」

やや間があってシュウが説明を始める。

「この人はダイガン・ヘル、特徴を一言で言うとは非常に面倒くさがりな人だ」

面倒くさがり、なんだかとてもしつくり来る言葉だ。

「年齢は十四歳、この村では一番の力持ちなんだが……」

そこで言葉に詰まるシュウ、彼が言いたかったことは何なのか予想して言ってみた。

「こんな性格だからなかなか力を発揮しない……とか？」

「あたりだ」

当たってしまった、自分は変なところでカンがいいんだあと改めて認識する。

「とまあこの人の説明はこんな感じでいいだろ」

シュウが勝手に話を切り上げて家から出ようとする、しかし何かを思いついたようでシンギに向き直りついてくるように言う。

シンギはまだ二人がもめているけどいいのかと聞いたがシュウは気にするなの一言で片付ける。

二人の様子が気になるもののいつまでもこの場にいるよりかはましかと思いきシュウについていく、つれてこられた場所は村から少し離れた場所だった。

木々が茂る森の中、今は暑い季節なのだが木が影を作ってくれているおかげであまり暑いと感しない。

木陰の中を移動する二人、彼らの歩みは森の中にある広場のようなところで止まった

「こんなところに連れてきて何する気？」

シンギはやや警戒しながら聞く、だがシュウは、
「別に、あの空間にいるのが息苦しかっただけだ」

と言う、本当なのかそうでないかは分からないが確かにあの空間にいつまでもいるのは自分もちよつとなあとシンギは思っている。
だが目的も無くここに来たと言うことは結局何もしない時間を過ごすと言うことだろうか？

二人は無言のまま立ち尽くす、シュウは何も話さずシンギも話題を見つけられず喋れない。

しばらく沈黙が続いた後シュウが口を開く。

「お前は何のためにこの村に来た？」

何かと思えば、シンギは変に警戒していた自分は馬鹿だったのか
と思ってしまう。

「だからこの村で生活したいから……」

「なぜこの村で生活したいと思った？」

変な事を聞くなあとと思いながらシンギは自分の考えを述べていく。
「そうだなあ……ただ単に興味を持ったからかな」

「興味？」

「そう興味」

そのときシュウの顔が不満そうに歪んだ。

「その程度の理由でここに来たのか」

不愉快な色を含む声にシンギは首を傾げる。

僕は何か気に障ることでもないっただろうか？何を言っただろう？
疑問を思い浮かべているとシュウがその答えを言った。

「興味本位程度でこの村に来た人がどうなったか教えてやろうか？」
興味本位で来た人、すなわち自分と同じような理由でここに来た
人のことだろうか。

その人々の結末をシュウはゆっくりと語りだす。

「ある人は経験も無いのに狩に出かけて獣に殺された、ある人は村
への帰り方が分からず行方不明、ある人は村での生活が嫌になり生

まれた故郷に帰ろうとしたところ運悪く山賊に出会い殺された……」
悲惨な末路、すべては興味により浅はかな行動をした者たちのせいだ、シュウはそう言いたいらしい。

事実には絶句するシンギを見てシュウはさらに続ける。

「興味で命を失うのはとても愚かで、なにより勿体無い。今村で生活している人は俺も含めてみんなそういう。シンギ、お前が死にたくないと言うのなら今から森の外まで案内する、答えは二択、この場で決めろ」

突如選択を迫られるシンギ、しかし彼はなぜか冷静だった。

「そんなの決まっているよ」

シンギはまっすぐシュウを見ながら言った。

「僕は町に戻る気は一切無いよ」

今の話を聞いてまったく臆することなく言い放ったシンギにシュウはこれ以上何も言わなかった。

「……戻るぞ」

それだけ言ってきた道に戻ってゆく。

慌ててシンギもついて行き二人は村に戻った。

町に戻る気はない、そう言ったのはあの場だけの事ではなかったらしくシンギはそれから村の掟に従いシュウたちとともに生活をはじめ。

最初こそ苦労したものの初めから弓を扱えるシンギは仮でもその能力を発揮し、シュウやダイガンと狩に出かける回数も多くなってきた。

村での生活、それは知らないことを知ることから始まり知ったことを生活に活かす。

時間が過ぎるのはとても早い。

朝から日が沈むまで獲物を狙い、夜はサクラのところで食事をした後には寝る。

それを繰り返しているうちに気がつけば五年の月日が経っていた。

見知らぬ少女

少女は走り続ける。

走らなければ死んでしまう。

逃げるために少女は走る。

父に言われた、捕まってはいけない！逃げるんだ、と。

少女は走り続ける、橋って近くの丘に着いた。

自分の伊田町を見ている、そして広がる一面の赤。

火が町を覆い町は真っ赤に染まった。

燃えて消える、家も、遊び場も、宿も、なにもかも。

少女は泣いた、誰かの勝手な理由で自分の大切なものがすべて消されてしまった。

まだ形があるものもあとには形を失うだろう。

少女は泣いた、ただ一人の行動で大切なものが失われるのは十六歳の少女には耐え難い光景であった。

少女は走った、いつかはここも見つかってしまう。

少女は走った、生きるため、生き延びるため、生き延びてこのことを誰かに伝えるため。

何日か経って少女は森を見つけた。

身を隠すところとしては絶好の場所。

少女は森―アイルスの森と呼ばれる場所に足を踏み入れた。

森の中に二つの影があった。

一つは木の上を縦横無尽に飛び回る。

もう一つは木々の間を疾走する。

やがて一つの影が動きを止めた。

それに習いもう一つの影も動きを止める。

影の正体は二人の少年だった。

「そっちは何かあったか？」

木々の間を疾走していた少年、シュウ・ヴァルセルクは問う。

「ぎゅんねん、なんにも無いね」

木の上を飛び回った少年、シンギ・ガラバクトは答える。

シンギが村に来てから五年、狩に慣れたシンギとシュウがともに行動するのは珍しいことではなかった。

二人は毎日のように森に狩へと出るのだが最近は何物もとれずに困っていた。

「そろそろ肉のストックが切れてきたから調達しないとやばいんだけど……」

シュウが腕を組みながら悩むのをシンギは笑って「僕はサラダでもいいんだけどね」とのんきな会話を繰り返す。

瞬間、シンギの視界を何かが横切る。

「今何かいたよな？」

シュウも気づいたらしくないが見えたかと聞いてくるがシンギにも「何か」としか捉えられていないので分からないとしかいえない。

「見に行ってみる？」

シンギがまるで答えを予測しているような口調で聞く、もちろんシュウの返答は、

「賛成」

だった。

五年、互いの好奇心の旺盛さを知るのには十分な時間だった。

少女は走っていた、後ろからは斧をもった三人の男が追いかけてくる。

男たちは山賊だった。

町から人が来ればそれに目をつけ金目のものを奪い、そのまま殺す、それが彼らのやり方だ。

少女は逃げ続ける、しかし運悪く木の根に躓いてしまった。

男たちがチャンスとばかりに斧を振り下ろす。

だがそれが少女に届くことは無かった。

がんという音と共に斧が腕から吹き飛んだのだ。

山賊の一人があっけにとられていると横から強烈な蹴りが入った。ほかの男二人が状況を理解できないでいるとさらに横から二本の矢が飛んできた。

矢の一本は一人の腕に当たりもう一本はもう一人の男の足に命中した。

すかさず蹴りを放った何かが地面に刺さっていた剣を抜いた、先ほど斧を飛ばしたものの正体はこれだろう。

何かの横にもう一つの何かが降り立った。

その正体は、先ほどから疾走していたシュウとシンギだった。

少女は状況が飲み込めず動けない、その少女にシンギが声をかける。

「その人だいじょぶ？」

少女はまだ答えることができない、シュウは気にせず山賊に視線を向けてシンギは「むしされた」とわざとらしく落ち込んでいる。

山賊たちは不意打ちに怒りながら一人が怒りのままに叫ぶ。

「てめえらもこいつの金目のものが目当てか！」

言われた二人はとても心外そうな顔をする。

「シンギ、こいつらの世界では女以外はみんな物取りやら山賊、海賊の類らしいぞ」

言葉に不満を乗せてシンギに言う。

「世の中を知らないって可哀相だね♪」

なぜかシンギが楽しそうに言う。

その余裕差が相手を余計に刺激する、山賊は雄叫びおたけを上げてシンギに斧を振り下ろし、シンギは寸のところそこでそれを避ける。

「危ないよ！急に攻撃しないでよ！」

そんなせりふを相手が聞くわけも無く、次々に斧が振り下ろされる、が、山賊の一人が不意にシュウに向けて斧を振り下ろす。

だがシュウはそれを予測していたように剣を頭上に構えるだけで

受け止める。

そのまま斧を払い一瞬の間に相手を切る。

山賊が倒れると同時にシンギのところからも何かが倒れる音がした。

見ればシンギと戦っていた二人の山賊が二人とも倒れていてシンギが疲れたような顔で立っていた。

「終わったよ」

「お疲れさん、でそこのお前……」

シュウが声をかけようとした少女はいつの間にか気を失って倒れていた、シュウとシンギが顔を見合わせる。

「よっぽど辛い目にあったみたいだね」

同情するような声でシンギが言う。

「とりあえずサクラさんのとこに連れて行って治療してもらうか」
シュウが少女を背負い二人は森の中に消えた。

最初に近くの家のドアが壊された、そこからあの出来事は起こった。

次にながしやがしやと騒がし音がした、その音が甲冑を着て走っていると知ったのはその人たちが自分の家に来てからだだった。

次に女の人の悲鳴が聞こえた、そこから何かを壊す音、炎が燃え上がる音が立て続けに聞こえた。

その音は場所を選ばずあちらこちらで同じような音がした。

何が起こっているか分からないまま私たち家族は行動が取れなかった。

そして音は私の家に来た。

ドアが破られ、家の中に油を撒かれ、火を点けられた。

何もかもが一瞬で燃えてなくなり、お父さんやお母さん、お兄ちゃんにお姉ちゃんにも火が燃え移る。

火は振り払って鎮火できたけどでも次の瞬間お父さんが槍で貫かれた。

炎の中にあふれる血、広がるのを待つことなく私の家族は次々に貫かれ、斬られ、焼かれた。

状況が飲み込めずただ立ち尽くす私にお父さんが最後に言った。捕まってはいけない、逃げるんだ、と。

言われるがままに走った、どんな道を通ったかは覚えていない、でも後ろから追ってくる足音だけは妙によく覚えている。

そこからどうなったかの記憶が無い、私はいったいどうなったのだろうか？

誰か教えて、私はどうなったの？誰か答えて、私は死んだの？生きてるの？

誰でもいい、お父さん、お母さん、お兄ちゃん、お姉ちゃん、お願い、教えて、誰か、誰でもいいから、教えて

ワタシハイッタイドウナッタノ？

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7185r/>

ベルゼルト

2011年5月27日22時10分発行